

第8回 第4期熊本市自治推進委員会会議録

日 時：平成31年3月14日（木） 午前9時～11時

会 場：熊本市役所 議会棟2階 議運・理事会室

出席者：澤田委員長、小林副委員長、秋山委員、家入委員、北岡委員、越地委員
高智穂委員、野口委員、遊佐委員、米満委員

欠席者：なし

事務局	(資料確認) 会議次第 席次表 【会議資料】 自主自立のまちづくりの推進についての答申書（案）について 資料1 (会議成立確認)
澤田 委員長	皆さんおはようございます。 自主自立のまちづくりの推進について考えてきた自治推進委員会は、市長への答申を前に今回が最後の開催となります。前回までの皆様の意見をまとめまして、答申書（案）という形で事務局から案が示されております。それに対して、再度色々なご意見をいただき、答申書を仕上げていきたいと考えています。文言の修正やこういったことを入れ込んだ方がいいなど、様々なご意見をいただきたいと思います。 また、今年度中に答申を行いますが、本日いただく意見についても事務局と私で調整を行い、可能な限り盛り込みたいと思いますのでどうぞよろしくお願いします。 前回の会議では、北区の住民アンケートについてご説明をいただきました。自治会について、よく分かっていない、特に若年層を中心に。また、ボランティアなどは意外に協力していいという人が多かったという話があったかと思います。そのようなことを踏まえて、委員の皆様から様々なご意見をいただきました。町内自治会や校区自治協議会を中心として地域活動をととても重視している意見が多くございました。それらを熊本市の特徴として答申にも打ち出していくということです。自主自立のまちづくりの1つのポイントになっていると思いました。 答申書については、文言が少し難しいので、地域住民にも分かり易くしたほうがいいのでは、特に5つのポイントについてはです。それらの意見を踏まえた答申書（案）を事務局に作成していただきました。 それでは議事に入りたいと思います。本日の議事は1点だけです。「自主自立のまちづくりの推進についての答申書（案）について」事務局から説明をお願いします。
事務局	それでは、審議事項の「自主自立のまちづくりの推進に向けて」についてご説

	明させていただきます。 自主自立のまちづくりの推進に向けて 資料1 以上で、説明を終わります。
澤 田 委員長	【質問等無し】 地域の一番小さい単位は町内自治会となります。その町内自治会の中に会長や役員などの様々な地域活動を行っている人がいます。これからの町内自治会の在り方について、どういうものが望ましいのか、ということについてまずは、お伺いしたいと思います。実現可能かは置いておいて、今後の目指すべき方向性があればご意見をください。 まずは、町内会長を担っておられる秋山会長はどのように考えていますか。
秋 山 委 員	はい。それでは、私の町内のことで最近、「良かったな」と思ったことについて、報告します。 まずは、熊本市では春と秋の1年に2回、一斉清掃を行います。私の町内では清掃の回覧を回す際に、子ども会にも声をかけます。子供が少ない町内で、約200世帯の中で子供がいる世帯が6世帯しかありません。一斉清掃のときには町内の神社に集まっていたのですが、子ども会にもぜひ、子供達を連れて来てくださいと案内しました。草取りがメインではなく、顔合わせを行う目的です。一人暮らしの方や高齢者の家族の方など、自分たちの町内にこんなに子供達がいいたのかとなり、結果として、草取りではなく子供達と一緒に喋ったりしています。これを見て、ずっと続けていくべきだと思いました。 また、これをきっかけにして、今年の敬老会のときには小学生と中学生が書いた手紙を発表してもらった時間をとりました。その中で、地震の後に校区は同じだが違う町内から、引っ越してきた家族の長男からの手紙が印象に残っています。「なぜ、自分がお母さんに連れられて草取りをしなければならないのか」という内容でした。前にお母さんを通して、「清掃を行っているこの神社は何ですか？」という質問をされました。これまでの歴史や、拝殿を集会所として利用してきたこと、地震の影響で解体して現在は空き地となっていることを説明しました。なぜ、空き地の草取りをしなければならないのかを疑問に思ったのでしょうか。そのときに、草取りをするのは、町内の和のため、みんなのため、ということも話しました。 引っ越してきたときは、同級生と遊ぶことはありましたが、下級生や近所の子供と遊ぶことはなかったそうです。それが、今となっては、草取りがきっかけとなって、みんなと知り合いになれて良かったという作文でした。 それから、また別の町内ですが、中学校2年生の女の子のあいさつについての話です。部活動が終わって、暗い中、下校しているときに「おかえりなさい」と

	知らない人から声をかけられたそうです。そのときは、びっくりして返事が出来なかったそうです。後日、「なぜ、あの人は私の声をかけたのか」ということを考えた結果、あいさつの必要性を改めて感じたという作文でした。たかが、挨拶一つですがほっとしたり、友達や近所の人との輪が広がったり、和むことに繋がったとのことです。私自身も挨拶の必要性を改めて感じました。 それから、大学生などの若者との協力についての話です。大学の周りのごみ集積所について、指定日や時間を守らない人が多いということで、どの自治会も困っていました。そのような問題を解決するために、学生の中にお揃いのジャンパーを着て、町内の人と一緒にパトロールを行い、集積所の片づけを行ったりしている事例があります。 さらに、自転車マナーの向上のために、学生自身が独自のステッカーを作り、自転車の乗り方についてのキャンペーンを開催しています。それには、私達や交通指導員、警察などと一緒にしています。 あと、一番学生の力を借りて助かっていることは、地域のお祭りの開催の手伝いです。準備の際には、いつも学生の力を借りています。 それから、始めたばかりで今年2回目ですが、校区内で認知症の方の声掛け訓練を開催しました。開催場所をルーテル学院としましたので、学生達にも参加していただきました。私達でもなかなか認知症の方の街歩きを見分けることは難しいですが、若いうちからこのような訓練に参加するのはとても良いことだと思います。 私の身近なところの経験では、こういったことを感じています。以上です。
澤 田 委員長	はい。ありがとうございました。 少し伺います。認知症の方の声掛け訓練やお祭りの準備に学生が参加するなどの紹介がありましたが、例えば、認知症の方の声掛け訓練は、誰がきっかけとなって始まったものですか。
秋 山 委 員	メインは校区の社会福祉協議会とささえりあと一緒になった取り組みで、去年は5町内と12町内だけでやっていたものでした。ただし、これはぜひ、校区全体でやるべきことということになり、今年から校区全体に案内を出して学生やスタッフなども含めて75名ほどの参加者で開催しました。 校区全域が広いため、参加者が集まるか心配しておりましたが、学校側でバスを用意していただき、参加者の送迎をすることになったので、歩いて来るのが大変な方の参加に繋がりました。今ではもっと回数を増やしていいと考えております。
澤 田 委員長	当初は一部の町内だけの取組を校区全体で実施しようと決めたのは誰ですか。
秋 山 委 員	当初は2つの町内だけで取り組んだことですが、訓練を実施した後の反省会の中で校区全体に広げたほうが良いという意見があり、今年から1から18町内すべての自治会長に回覧で案内をして、校区としての開催としました。 主なスタッフは校区社会福祉協議会とささえりあの職員ですが、寸劇の役者な

	ども呼んだり、自治会長に認知症の役を担ってもらったりしました。
澤田 委員長	分かりました。重要な自治会の取組を校区自治協議会が吸い上げて、校区全体の取組に繋げたということで、とても参考となるお話でした。 それでは、自治会の話ということでせっかくですので、次の家入委員はいかがですか。自治会の在り方、あるいは地域の在り方といった点でご意見をいただきたいです。
家入 委員	私が小学校のPTA会長を担っていた時は、各町内会長さん達とは密にやり取りを行っていましたが、これが、中学校になると地域との繋がりが薄れてきます。 それでは、私が個人的に一住民として町内会とどのように関わればよいかと考えてみると、まずは、地域に関する情報が入ってこないことが壁になっています。地域の情報ツールとして回覧板がありますが、どうしてもスピーディな情報伝達に繋がっておらず、手元に届くときには既に半分ほど期日が過ぎていることもあります。そういった状態が続くと住民側としても、「地域は何をやっているのだろう？」となってしまう段々と興味も薄れてくると思います。地域としても興味を持たせるために、情報伝達にしてもツールにしても考えていく必要があると思います。そうでないと開かれた地域運営にも繋がっていきません。情報が入ってこないことには、「私たちの地域は何をやっているのだろう？」というのが分からないので、地域活動の成り手も当然減ってくると思います。情報がどんどん入ってきて、例えば「10回情報が入ってきた中で1回行ってみよう」といったように自分の興味と合うものがあれば参加に繋がってくると思います。そうすると、参加してみることで、何か気づくことや生まれてくることもあると思います。さらに、そのような気づきなどが今度は、「もっとこの地域のことを知りたい」や「地域を好きになろう」という気持ちが芽生えてくると考えています。 私自身も最初は地域のことに全く興味がありませんでした。しかし、関わっていくうちに「これじゃダメだな、こうしたほうがいいな」といったことを徐々に考えるようになりました。なので、そういったことを繰り返すことで、最終的に個人個人の意識が変わってくるのではないかなと。最初に個人の意識を変えようとしてもなかなか変わらないと思います。まずは、呼びかけを行うことが地域としても大切だと感じます。
澤田 委員長	はい。ありがとうございました。参加することによっての気づきといった話でした。 次に北岡委員ですが、これまで自治会の運営方法などのご意見をいただいてきたところです。どのようにあるべきでしょうか。
北岡 委員	私がこの会議に出席する前、町内の身近な人に「あなたたちは地域の中で生活する中で絆はあるか？」と聞いたところ、みんな即座に「ない、ない」と答えました。その程度です。私が自治会や校区自治協議会に関係していることから、いつも思うことは、「住民」と「町民」の違いについてです。「住民」というのは、ただ単純に住んでいるだけの人のことを指すと考えました。私はそこから「町民」になっていただきたいです。何かの形で地域と関わりを持っていただき、自分の

まちを好きなまちにしてもらい、更には、好きな熊本市にまで発展するような取り組みができればいいなと思っています。

今日は高校生が傍聴していますが、子供を含む多世代間交流という言葉も気になっています。先日、米満委員からいただいた名刺に「多世代間交流」という言葉が載っていました。この言葉に基づいて、どういった活動をしているのか非常に興味を持ったので、一度、米満委員にお尋ねしたところですが、なかなかお忙しいようで話が聞けませんでした。

私自身も校区で公園愛護会長をやっておりますので、よく花壇の整理に行きます。2年前の話になりますが、私が花壇の整理を行っていたところに、公園で遊んでいた小学生の女の子が「おじちゃん、手伝う」と言ってくれました。それから2年経って、その女の子は4年生になりました。この前、久しぶりに会いましたが、言葉遣いも「そうですか」といった敬語を使うようになっていました。

それから、地域の繋がりとして、先ほど秋山委員からも話がありましたが、挨拶が大切だと思います。私の家の前を中学生、高校生が結構通ります。そのときに、全然知らない子から、「おはようございます」、「こんにちは」と挨拶を受けることがたまにあります。そういった挨拶を縁として、一番年を重ねた人は40歳程になります。その子は高校生の時に挨拶を始めて、40代になった今では、親子で付き合うようになりました。また、小学校から挨拶をきっかけに知り合った子は、大学入試に失敗したという話もしてくれました。この前、畑仕事をしているところに1時間ほど遊びに来てくれました。そのときには、色々な情報をもらいました。どういった生活を送っているのか、学校はどうか、などです。

自治会の中に若者と入れるということで、先日の会議の湖東中学校地区生徒会の取り組みのことを、もっと詳しく聞きたいと思っております。池の中に石を投げ込むと波が広がっていくように、良いことが各町内、各校区で広がっていけばいいのにな、と思っているところです。そうすると、きっと良いまち、良い熊本市になっていくと考えております。

また、私は校区自治協議会の会議に出席しています。以前、話ししましたが、日本の半分程の県は「パトラン」という、散歩しながらボランティアとして町内のパトロールをしている取り組みがあります。これには、ぜひ、市が行政として音頭をとってもらいたいと思っています。例えば、市政だよりなどでその取組を紹介するなどです。ただ散歩するときに赤い服や帽子などを着るだけの取り組みですが、全体として進めないと一人の意見では、なかなか通りません。防犯会長に相談したことがありますが、クールな答えが返ってきました。「あなたが言ったことは、今度の会議で伝える」といった回答でしたが、「校区の会長が集まる会議で言ってみた」などの返事がいつになってもありません。地域活動の役に付いている人は、住民の思いを考えてくれる人になっていただきたいです。

私はこの前の会議で、自主自立のまちづくりということで、6町内の住民が地域の公民館を建てたという話をしました。住民からの寄付もあり、大変立派な公民館が建ちました。前もって、自治会長にこの会議で発表したいことを伝え、会

	議が終わった後も、こういった内容で発表したことを伝えたところ、大変喜んでおられました。町民の人たちを巻き込むためには、町民の意見を簡単なことでも良いので、「こういった形で反映された」ということが分かるといいと思います。また、「あなたはいつもゴミ拾いをしているね」といった誉め言葉もいいです。 市のほうで、地域活動を頑張っている人を表彰するという事で、私の町内から、長年ごみステーションを管理しているという理由で私が推薦されました。私事ですが、前の幸山市長より表彰状をいただきました。今も長く続けています。泥棒から言わせると地域のごみステーションが汚いところは、住民の生活もルーズであるため、空き巣に入りやすいようです。一方で、管理されているごみステーションは見ていて気持ちが良い。ですから身近な関わりを少しずつ行うことで、住民から絆の深い町民になってもらいたいというのが私の意見です。
澤 田 委員長	はい。ありがとうございました。 単なる住民ではなく、住んでいる町にきちんと関わること、意識を変えてほしいという意見でした。 それでは、次に越地委員よろしいでしょうか。越地委員はスローガンなどを考えるのがお得意ではないでしょうか。
越 地 委 員	最初に抽象的なこととお話しします。こういった問題を考えるときには、地域こそパワーの原点であるという前提で、地域に対する尊重と信頼を持つことがスタートだと思います。地域への尊重・信頼。そうすると、それを向けられた地域は、それに対して応える責任があります。こういった循環は大切だと思います。少し抽象的な言い方で申し訳ないですが。後でもう少し詳しく説明いたします。 また、これを言葉で言い換えると「地域ファースト」という概念です。トランプ大統領は「アメリカファースト」で、小池知事は「都民ファースト」という言葉を用いています。この言葉をなぞらえて言えば、「地域ファースト」という言葉はもっともっと再認識する必要があります。「地域こそ」という意味が「地域ファースト」ですね。 それでは、具体的にどうするのかということがこの会議のテーマです。まずは、自治会から話を進めて、後で校区自治協議会と進む流れだと思います。ただし、この2つの組織はどうしても繋がっています。自治会をやっている校区自治協議会もあり、校区自治協議会も自治会抜きには語れません。そういう意味では連動して、とりあえずは考えたいと思います。そうなりますと、自治会と校区自治協議会のどちらから先に新しい道筋を見出していくかということ、私がいつも言っているように校区自治協議会から入ったほうがやり易いのではないかと思います。 一つは、熊本市は町内会が900程度あります。校区自治協議会はその1割の90程度です。そのため、まずは数の少ない組織をターゲットに置きます。先ほど、地域に対して信頼すること、される側はそれに応える責任があると言いました。責任がある校区自治協議会とすれば、やはり様々なノウハウを身につけなければならない。運営の在り方などです。潜在能力を持った人が集まっていますが、残念ながら、慣れていなかったり、期待を感じていなかったりするようです。校

	区自治協議会からいろいろな突破口を見つけることで、町内会は変わらざる負えません。なぜかという、月1回の校区自治協議会の会議で発言するときに、「今までと違った発言をしなければならない」という自覚が自治会長に芽生えます。そうすると、同じように月1回の町内会の会議でも同じようなことが起こります。また、町内会の会議で出た意見は、校区自治協議会の会議に持っていかなければなりません。このように、校区自治協議会と町内会は密接に繋がっています。よって、自治会を考えることは校区自治協議会を考えることです。また、校区自治協議会は、熊本市の宝と言える存在として、どのように高めていくのか。その具体的な方法論は、後で皆様から出てくるかと思います。「地域ファースト」という概念をとにかく持つこと。それを具体化するの町内会であり、校区自治協議会です。どちらかという、校区自治協議会から入っていく方が、その10倍の数の組織である町内会への波及効果も同時に狙えるのではないかと、ということです。 もう1つ言えば、「町内会では何ができるのか?」、「校区自治協議会では何ができるのか?」という問いをすると分かるかもしれませんが、一種の自信の無さもあるかもしれません。しかし、そうではなくて、単純に気づいていないだけです。「町内自治会もしくは校区自治協議会で何か決めたことはありますか?」と投げかけを行う。小さなことでもいいので。「我々が決めたやったことだ」ということが、実は沢山あります。そういった達成感を感じることを振り返ってみることも重要です。「あれは、自分たちで話し合ったことで出来たことだ」と分かれば、更に取り組みを広げていけば様々な提言ができることに気づくと思います。 ぜひ、地域政策の決定の場ですので、小さいことも含めて、事例集のような「どこの地域が何をやっている」かが分かるものを作ると良いです。そういったことが地域運営の自信にも繋がっていきます。それに関して女性パワーを活用するというのも私の持論ではありますが、重要だと考えています。これについては、機会があれば、後ほど説明いたします。 以上です。
澤田 委員長	はい。ありがとうございました。 また、後ほど校区自治協議会がどう変わるべきなのか、といったことへのご意見も伺いたと思います。 次に米満委員よろしいでしょうか。
米満 委員	まずは、私自身が外に出ていることが多く北岡委員とお話が出来ずにすみません。 こういった会議で地域に関する話をしていると、なるべく部屋の中に入っていないで、外に出て色々な人に会って、色々な人の話を聞いて、話の中で出てきた人とも繋がっていくようなことが、何らかの形で役に立っているかなと思っています。 今日の皆さんの話を伺いながら、地域を作っていくことについて、ずっと考えてきたことが「3つの“つ”」です。「3つの“つ”」というのは「つながる」、「つむぐ」、「つづける」ということです。「つながり」は連携のこと、「つむぐ」は育

	てていくということ、「つづける」は継続するということです。そういったことがベースとして大事なことだと思います。先ほど越地委員もおっしゃいましたが、みんなで何にかをやっていくときには、1つのテキストのようなものがあり、地域活動はどのように行えばよいのか、何から始めたらいいのかが分かればいいと考えています。最初は、地域の人たちの中にも上下関係があったりして、「あの人を呼んで、この人を呼ばないわけにはいかない」といったことを聞いたりします。そのようなことは置いておいて、非常にシンプルな手引書、入門書といったものです。それがあると、話し合いをするテーブルの場でも、みんながそれを見て会議を行うこともできます。「なるほど、熊本市ではこのようなやり方をやれば、もしかすると上手くいくかもしれない」となるかもしれません。あとは、それぞれの地域のオリジナルを作っていけばいいと思います。ですから、その最初の一步をみんなでそれを読み上げて運営ができるようなシンプルなものがあれば、地域活動がしやすいのではないのでしょうか。 例えば、本屋さんでそのような類の本を読んでもみると、とても内容が難しいです。そのような難しい本ですと「無理」となってしまいます。そのため、小学生であってもクラスの中で地域のことを勉強するときに、お手本のように手引書として使える薄くて小さく、ハンドバックに入るようなものがあればいいです。 それから、現在の地域の「多職種多世代」はとても大切です。いろいろな人が住んでいます。このような言葉が適切かは分かりませんが、「多士」、あるいは、「多士多考」ということで、住んでいる人のそれぞれの思いも様々です。それは当然のことです。そのため、決してぐちゃぐちゃになることを恐れないで、皆さんの意見を出し合っていただくことで、地域の力に繋がっていくと思います。また、そのようなことが手引書にも少し書いてあるといいなと。 日々思っていることをお話ししました。以上です。
澤田 委員長	はい。ありがとうございました。 今のお話も非常に参考となるものでした。もし、自らが自治会の役員や会長になったときに、「何をすればいいのか」ということが分かりません。例えば、会社だと研修のようなものがありますが、それが何もない場合に「いきなりやってください」では全く無理な話だと思います。もっともなご意見でした。 それでは、次に遊佐委員お願いします。
遊佐 委員	地域の問題というのは様々あるかと思います。そのような中で、地域の活動や関係性は定例化してきている場合に、何か爆発物のようなものが必要だと感じています。要は「きっかけ」を作れるようなものが必要ということです。そのような「きっかけ」を作ることが、例えば、外部の企業の人たちが地域と関わることでいいと思います。また、校区単位の地域と関わりのあるお母さん方の抱える問題点などを一つ一つ、地域の人みんなで切磋琢磨しながら取り組んでいくことも大事です。 また、一つの問題を定義したときに、それが達成できたときの達成感も重要です。誰の意見であっても取り入れてくれるという気持ちを作っていないと、住民

	の達成感にも繋がらないと思います。困ったことが1つあったときに、NPOなどの団体が力になれることがあります。そのため、NPOなどが取り組んでいることであったり、目標に向けた動きがあるかと思います。そういった情報を一般の人と共有することが必要です。 地域のことをその地域に住んでいる人だけでなく、外部の力も借りながら活動を行っていけばいいと思っています。
澤田 委員長	はい。分かりました。ありがとうございます。 それでは、野口委員お願いします。
野口 委員	今月11日に私の自治会の緊急会議を行い、現在、地域で抱えている問題について話し合いました。校区自治協議会、それから町内自治会の在り方を考えるときに私がいつも念頭に置いていることは、「ずっと住みたいわがまち」ということです。現在、成り手不足や伝統芸能の継承など、手をつけられない時期にきております。 私の地域では20年ほど前から、隣保組の単位で「男組10人衆」というものをずっと続けております。これは、私の年齢が一番上で一番下が50歳ほどです。職業もばらばらです。年に4、5回集まって、わいわいと話し合いをしています。これを地域の人を巻き込んでどのように膨らませていくのか、そのあたりを再度見直しているところです。 皆さんから様々な意見が出ていますが、私の地域の校区自治協議会、町内自治会において一番まずいことは、会長などの9割が1年という短い期間で交代するということです。そのため、毎年新人ばかりです。自治会長になったら何をしなければならぬのかが分からない状態です。行政の方に、いつもお願いしていることは、自治会などが任意の団体であることは関係なく、そのあたりの指導を行ってくれと言っています。例えば、「自治会長はこういったことをやるのですよ」といったようにです。 しかしながら、やはり任意の団体なので、なかなか口出しができないのが現状だと思います。今は、65歳、70歳まで仕事を行っています。そのため、仕事を持ちながら、どれだけ地域の役を担えるかという点で難しい時期に来ております。私は、一通り、老人会長まで行ってきました、そろそろ二巡目に入ろうとしているところです。これは、私の地域だけでなく、どこの地域も抱えている問題だと思います。 要は、子供から青少年、高齢者など、自分たちの地域に住む人達で、どのように地域を運営していくのかがとても難しい時期にきております。そういったことから、自治会長の役割も非常に重要になってきていると言えます。以上です。
澤田 委員長	はい。ありがとうございました。 では、高智穂委員お願いします。
高智穂 委員	まとまっておりませんが、いくつか思いついたことをお話しします。 まずは、「入口」が大事ではないかなということで、自治会に対するイメージがあまり良くないのではないかと思います。「自治会活動をやっている」ということに

対して、「おお、すごいね」と言われることはあまりないと思います。「大変でしょう」、「面倒くさいでしょう」、「2年に1回やらないといけないのでしょうか」といったイメージだと思います。押しつけではないですが、自治会長になってこのまちを良くしたいということで、やり始めた人はあまりいないのではないのでしょうか。

私は北区に住んでいるのですが、先日、北区役所から30ページ程の自治会に関するアンケートが届きました。無作為で選ばれたと記載してありましたが、本当に無作為かな、と思いながら回答しました。北区に住んでいる人の中から1万人を無作為に選んだとのこと。そのアンケートに回答するのはものすごく大変でした。丸を付けたり、記述が必要であったり、とにかく様々な項目があって大変でした。

しかし、全部回答し終わったときに、自分自身の住民としての立ち位置が分かりました。「地域住民として、私は何もやっていない」ということです。先ほど、北岡委員が「住民」と「町民」の違いという発言をしておりましたが、私自身もこのような会議で発言したり、取材に伺うことはあるのですが、実際に北区に住んでいて、何もやっていないことに気づきました。アンケートの回答を通して、「自治会と何かをやったか」と改めて考えてみると、子ども会に関連することだけでした。全市民を対象とした調査は難しいかもしれませんが、こういったアンケートをしてみることで、自分の立ち位置が分かり、自分の立ち位置が分かると、「地域ではこんなことをやっていて、それに対して自分はこういうことができる」と繋がっていくかもしれません。最初は、回答が面倒臭いアンケートにお金をかけてもったいないと思いましたが、回答が終わってみると大事なことだなと感じました。

家入委員が発言されたように、みんなに浸透させることはなかなか難しく、興味を持って関わっていこうと思った人が少しずつ関わることで活動が広がっていくと思います。少しでも興味があって動くことができる人を増やしていくということです。

現在、自治会長を務めている人の育成として、「こういうことをやろう」だったり、「こういうことができる」といったようにスキルアップを図ることも重要です。しかし、野口委員がおっしゃったように、自治会長自身がすぐに変わっていくので、毎年そのような育成を行っていくのは、本当に無駄だと思います。なので、それよりもこれから自治会を担っていくような人を対象として、「自治会ってなになのか?」、「自治会はこういうことをしている」ということを各世代に知ってもらうことが重要だと思います。おそらく、PTAの役員などを行っている方が、そのまま自治会などの役員になっていく流れはどこも同じかだと思います。PTAの中でも学校を良くしていきたいと考えて、子供達の教育環境を整えて勉強してもらいたいという思いで活動を行っています。それが、自治会や地域を良くしていこうという思いと一緒になってきますので、きっと自治会活動などの大切さも理解してくれるのだと思います。

	しかし、普段生活していると、何で自治会活動が大事なのが非常に分かりづらいです。そのため、米満委員の言っていたシンプルな入門書のようなものを、自治会活動と全然絡みのない人たちに対するアプローチとして活用していけば、少しずつ変わっていくのではないのでしょうか。また、PTAに入るきっかけも、すごく敷居が低くなると思います。各世代ができることは何なのかを考えていただくことが大事です。 今の自治会長や役員さんの負担はすごく大きいです。「地域のことを全部その人がしなければならぬ」ということになっていますが、そうではないと思います。全部を抱えずに、住民の力やNPOの力、行政からの力を集めることが重要です。 先ほど、越地委員が「地域ファースト」といったタイトルのようなものを発言していましたが、私は、「自治会イメージアップキャンペーン」といったものを熊本市が打ち出して発信していけばいいなと考えています。 長くなりましたが、以上です。
澤田 委員長	はい。ありがとうございました。 全くおっしゃる通りで、町内会長などが地域のことを全部自分で抱え込まなくてもいいはずなのですが、手伝いを頼む人がいないということもあるかもしれません。住民側は、「やってくれるから、いいや」といったようにただ乗りしている状況です。イメージ自体を替えていく必要があるというご意見でした。ありがとうございます。 では、小林副委員長お願いします。
小林 副委員長	皆さんの意見の中には、もっともなことが沢山ありました。私自身、色々などころから色々な考えが生まれてきて錯綜している状況です。そのため、具体的な小さな1つ1つについては、皆さんがおっしゃっていますので、それらを総括して考えてみたいと思います。 どのように自主自立のまちの姿を考えるのかといったときに、住民が具体的に活動に参加するプロセスを事務局が資料にまとめております。おそらく、そのようなプロセスの一番始めにくることは、「知ること」だと思います。その「知る」というのは、自分の立ち位置を知ることですし、自分の住んでいる地域を知ることでもあります。あるいは、地域の中にどういった人がいて、どのようなノウハウを持っているのかを知ることもあると思います。つまりは、周りを見回して、まずは「知る」という作業こそ、最初の段階にあると感じています。 そして、その次に「繋がる」という段階かと思います。「自立」という言葉にしても、自分で立つという字ではなく、自分で律するの「自律」が重要だと私は思っています。これは、自分1人だけで完結できないことは沢山ありますが、例えば、他の地区と連携してみたり、企業と連携してみたり、NPOや大学の力を借りたりといったように、ノウハウなどを持ったところと繋がることで、自分たちのできることの幅がどんどん広がっていきます。 そのときのキーワードとしては、先ほど越地委員がおっしゃっていた「地域ファースト」もそうですが、「地域が主役」という言葉も私は好きです。私の専門の

観光分野でも着地型観光ということで、「地域が主役」の観光について見つめ直しているところです。やはり、主役は地域ということで、色々な人の話を聞いて、色々な人から知恵を借りて、色々な人からノウハウをもらいますが、「やるか、やらないか」といった最終的な決断や実際にアクションを起こすのは地域ということが重要です。

そのため、主導権については、絶対に地域が手放してはいけません。そのため、自分で立つ「自立」ではなく、自分を律するの「自律」と発言しました。何をやるべきなのか、何をやるべきではないのか、あるいは、誰がやるべきかなどを決断する最後の要は、常に地域が持っているべきです。

そして、最終的に知ったり、繋がったりした後の段階としては、「参加する」であったり「やってみる」だと思います。具体的に自分自身ができることは何なのか、今の地域ができることは何なのか、を考えながら、タイミングを見て実際にアクションを起こすことです。

それらの3つの流れがうまく具合に成立することで、スムーズに地域が動いていくような気がします。

私自身は熊本に5年程しか住んでおらず、限られた経験しかありませんが、主な動きとしては西区芳野地区でのオレンジカクテルナイトを通じた地域の人たちとのやり取りです。最初に宝探しというワークショップをやりましたが、地域の色々な世代の人たちに参加していただきました。「自分たちの地域で誇れるもの」や世代を超えて次の世代に残したいものは何ですか、という話をしました。女性の人だけに集まっていたいたり、町内のマネジメントを行う自治会長に集まっていたいたり、子供達に集まっていたいたり、様々な地域のセグメントの方に集まっていただきワークショップを行いました。そうすると、年齢やバックグラウンドなど、今までその人が関わってきた背景によって、地域に対する思いであったり、地域の中で何が大切なのかといった視点が少しずつ違うことが分かります。

しかし、このワークショップが終わった後にみなさんがおっしゃる共通のことは、「やっぱり自分たちの地域って素敵だよね、素晴らしいよね」ということでした。さっき、高智穂委員がアンケートに回答して、自分の立ち位置に初めて気づいたという話もありましたが、改めて地域のそういったことを見直すための場というものが、すごく必要だと思います。結局、その後、地域がどのようにやっていくのかということは、自分の住んでいる地域に誇りを持ったり、自信を持ったり、そして何より次の世代になっても住み続けたいと思えるかどうかが大事になります。そのために、そういったことに改めて気づくことができる場作りのようなものが、すごく重要だと思います。

今のイベントを通じていつも考えていることですが、何かアクションを起こすときには、去年やらなかった新しいことに挑戦してみることです。例えば、今年度はミカンを使ったジャム作りをやってみて、イベントで出してみましようといったことなどです。また、ミカンの皮を使ったりキュールを新しく作ってしまし

	ようなどです。 地域でできるほんの小さなことでもいいのです。それをやることで、さらに地域の人たちが元気になる場面をいくつも拝見してきました。そういった流れの中で、地域は自分で立つのではなく自分を律していくように地域自身が育っていくことが、とてもいい流れだなと感じています。 委員の皆様は色々と具体的なアイデアをお持ちなので、それらのフレームとなってまとまるものができればいいですね。
澤田 委員長	はい。ありがとうございました。 ただいま、一巡皆様からご意見をいただきました。 小林副委員長からのお話では、まず「知ること」が最初の段階にあって、自分たちの地域の魅力を発見して徐々に関わりができてくる、というものでした。 地域自体が自立していくようなシステムや流れのことを、私自身がそうですが、我々はもう少し知らなければいけないのかもしれないかもしれません。今の自治会の方々がどのように地域と関わり始めたのか、どのように継続しているのかといったようなことを私もあまり知りません。実際に聞いてみても、なかなかよく分からないということで、米満委員からは手引書の作成というご意見もありました。 また、野口委員からは、担い手の育成をどのように行っていくべきかという話もありました。しかし、現状で担い手がどのように育成されているのかもよく知りません。 そのようなことについて、少し研究不足だったなと感じています。例えば、この委員会のメンバー何人かで研究会のようなものを作ってみて、どのように地域のなかで人材を育成しているのか、そのようなシステムのことを勉強してもいいかもしれません。 自治会のイメージを変えたり、「地域が主役」となるような地域づくりについては、それを地域の方々に対して、示すことができるような転換が必要です。「自治会は大変だね」ではなく、「自分自身も関わってみたい」というようにイメージを変えていくような取り組みです。「地域自体が生まれかわる」というイメージ戦略と、それを実際に行っていくために、きちんと地域が自立していくシステムのようなものをこちらから提供していくことが求められます。「こういうふうにすればいいのではないですか」といったようにです。 それでは、自治会についてのご意見があれば後ほど伺うとして、校区自治協議会に移りたいと思います。先ほど、越地委員からは校区自治協議会について、もう少し力を入れていくべきだというご意見がありました。そのため、まずは、越地委員からお話を伺いたいと思います。 校区自治協議会はこれからどうなっていくべきだと思いますか。
越地 委員	その前に事務局に1点質問です。先ほど北区で実施した自治会に関するアンケートの話が出ましたが、これは全区でやっていることでしょうか。
事務局	北区だけの取組です。
越地	私はアンケートの中身は知りませんが、非常に大事なことだと思います。

委 員	
高智穂 委 員	全部コピーして取っておきたかったのです。あまりにも量が多く、1冊の冊子分くらいありました。
越 地 委 員	数十ページは大変ですが、それこそ全区でやるべきではないでしょうか。
高智穂 委 員	あれだけ細かい内容だと、回答した人は自治会などがどのような仕組みなのか分かりますと思います。
越 地 委 員	分かる一方で、回答することが大変だと思う人もいないではないでしょうか。
高智穂 委 員	いると思います。そのため、どれだけ回答があったのか気になっているところ です。
越 地 委 員	貴重なアンケートだと思います。どのような設問だったのでしょうか。1つ2 つ教えてください。
高智穂 委 員	本当に細かい内容でした。まずは、年代といった個人的なものから、「自治会について知っていますか」といった基本的なこと、さらには「あなたが参加したことがある自治会活動は何ですか」といった設問までありました。また、福祉や高齢者、子育てなど様々なジャンルについて、「住民としてどう考えるか」といったように、かなり細かい内容もありました。 回答していて、「まだあるのか、まだあるのか」と感じたので、先ほども話しましたが回答がどれだけあったのか気になっています。
越 地 委 員	ありがとうございました。ぜひ、全市的な傾向も知りたいところです。 それはさて置いて、「自主自立」といった四文字で片付けようとしています、 「自主自立」とは何かと改めて考えると難しいです。私は、自治会における「自主自立」とは、「自分たちのことは自分たちで決められる」ということだと思っています。 それでは、現在の自治会はどのような状況かといいますと、言葉は悪いですが「雑用処理チーム」のようになっています。私たちの仕事や趣味でもそうですが、自分自身がやりたいことをやるときに苦労は厭わないですね。そして、誰かの協力を得るなどして実現できた場合には、お金にも代えがたい達成感に繋がります。そのようなところから「やりがい」というものは出てきます。最終的には区役所や市役所に諮らなければいけない場合もあるかもしれませんが、それでも「自分たちで話し合っ、て、こういうことを決めた」ということが、自信に繋がります。さらに、そのような自信を浸透させることで、「やりがい」にも繋がります。自治会長などの報酬はほぼゼロに近いわけですので「やりがい」がないと担い手も出てきません。そういったことを思いました。 次に、校区自治協議会の話に移りますが、私が校区自治協議会の制度設計に関わっていたことがあるため、まずは、2、3分ほど概念的なものをお話しします。校区自治協議会をなぜ、作ったのかという話です。 もともと、各小学校区には16、7の各種地域団体がありました。その中での

	リーダーは自治会連合会でした。この自治会連合会というのは、文字通り、自治会長の集まりとして各校区にあったもので、そこが、地域の中の最高機関という位置付けでした。しかし、地域ではその他に、PTAがあり、社会福祉協議会があり、防犯協会があり、青少年健全育成協議会がある、といったように16, 7の各種地域団体があったわけです。さらに、それぞれの団体が市役所のそれぞれの部署と繋がっている状況でした。 そうすると、PTA会長、防犯協会会長といったように、各種地域団体の長が地域の中には何人もいることになります。少なくとも私の記憶では、そのようなリーダー達が対等な立場で話し合う場として作ったのが校区自治協議会です。言うならば、自治会主導というわけではないのです。ただし、以前の自治連合会の流れが残っているところがあり、連合会の会長が自動的に校区自治協議会の会長になるケースも非常に多いです。ただし、他にも社会福祉協議会の会長が校区自治協議会の会長を担っている場合もあるため、誰がなってもいいわけです。そのあたりの融通は持たせてあります。 なぜ、このようなことになったかという、校区全体の運営の中では、子ども会や婦人会などの各種地域団体が非常に頑張っており、そのような団体が一堂に会する場があれば、校区の中で何か新しいことが生まれるのではなかといった期待からです。校区自治協議会はまさに、そういった場ということでできたものです。 私は先ほど、「地域に対する尊敬・信頼」といった概念が一番大事ではないかと発言しました。ただし、信頼されたからには、その信頼に対して応える責任も出てきます。そのような役割を仮に校区自治協議会が応えると設定した場合、校区自治協議会の会長の存在は非常に大きいものだと思います。「自分たちの校区のことは我々住民で決めるのだ」という立場になるからです。 現在の熊本市は75万人の市民のトップに市長がいます。さらには、5つの区に分かれて、それぞれに区長がいます。そのあと96の校区長がいる、というイメージです。ただし、区長までは非常に権限も明確で大きいですが、校区長となると、位置づけも明確化されていません。校区長に責任を負わせるという意味ではなく、それだけの価値を持っているということです。「区長の下には96の校区長がいる」という位置づけです。 現在、全国にこういった校区自治協議会という組織があるかは知りませんが、設立当初は大変珍しいものだった気がします。校区単位でまちづくりを進めようというのが根っこにあるわけですね。そうすると、校区単位でまちづくりを考えた場合には、先ほどの16, 17の各種地域団体があるわけです。そして、それぞれの長が集まって、活発な議論をしていただく。そして、今まで各種地域団体が市に対して、ばらばらに要望していたものを、校区自治協議会の会議の場を踏まえて、「校区として」市に投げかけを行うことができます。そういったことから、存在は大きなものだと考えています。 先ほどから各委員の話に出ているマニュアル的なもの大事ですが、実際に「大
--	---

事、大事」と言われ、色々なところから校区自治協議会の会長が選ばれているため、テーマ別の研修の場というのは凄く重要です。年に1回校区自治協議会研修というものがあり、実は、今月中に開催されて私もお世話になる予定です。これについて、市の担当者には、「1回やっただけでは帳面消しですよ」と言っています。1回やったという実績は残りますが、何が伝わりますかという生意気なことを言っています。ぜひ、広報のやり方、自治会運営のやり方、人材育成の方法、先進的な事例発表も含めて、テーマ別で研修を開催することは、地域を信頼すればするほど必要になってくるかなと思います。

例えば、会議という1つの小さなことであっても、資料自体がない会議も見受けられます。今日の会議のテーマは何なのかが口頭でしか出てきません。このような会議では、参加した人にもなかなか伝わりません。さらに、色々な意見が出た場合、会議が終わる際に「今日の会議では何が決まって、何が持ち越しになったのか」という整理を行っているところは非常に少ないと思います。これは、怠慢ではなく、単純にやり方が分からないだけです。そのため、「なるほど、そういうやり方があるのか」と気づくような研修場さえあればいいのです。私も地域の会議に以前出席していましたが、色々ご意見があったものの、結局は分かったようで分かっていないという状況がありました。中には「今日はこれが決定しました」、「これは色々な意見があって持ち越しとなりました」といったように確認するところもあります。校区自治協議会の会議の場でこのようなことを行っていけば、次にそれぞれの自治会に持ち帰って決定事項などを話します。これがない場合には、各種地域団体のリーダーについても、それぞれの活動に戻ったときに校区自治協議会の内容をうまく説明できません。たかが、それだけのこともかもしれませんが、この1つの小さなことを変えるだけで、大きく地域も変わってきます。

そのため、このような小さなことの積み重ねの場として研修が重要になってくるということです。

それから、「女性の力」について、よく話をしているのですが、実は先日、全国の女性自治会長会議というのが初めて開催されております。これは、内閣府の呼びかけです。急遽、各都道府県と政令市に「どなたかお一人推薦してください」と呼びかけがあったようです。現在、熊本市には校区自治協議会の女性の会長が2人おられます。その2人のうちの1人が熊本市からも行っております。

これを知って思ったのですが、「第1回」というところがポイントになります。要は国が「女性の力」に目を付け始めたということなんですね。色々な地域の問題を考えるときに、組織の中に女性が少ないと思ったのでしょう。熊本市はそれよりも先に、もっと早くにそういった意識を持っていますので、輪をかけて取り組むべきです。全国では今始めたということですので、大して進んでいないという裏返しでもあります。

女性を会長に据えれば課題が解決するのかなということ、これは当然イコールではありません。女性が会長になることで、解決に向かって前進するということでもないと思います。ただし、これだけ職場や家庭などいろいろなところで女性の進

	出が叫ばれているときに、地域だけが非常に置き去りになっています。これはどう考えても歪な状況です。女性でなければいけないということではありません。女性がもっといてもいいではないか、ということです。これには、誰も反論はないと思います。女性の比率は3割がいいのか4割がいいのかといったことは関係ないことです。現状で、96人の校区自治協議会会長のうち、女性は2人しかいないことは、色々なバランスを考えると不自然なことです。このあたりも、校区自治協議会を変えていく1つのポイントになるかと思います。 ぜひ、「校区長」という新しい肩書ではないですが、自覚、存在感の重さを認識すること、それから「女性の力」とうことが、校区自治協議会が変わるきっかけになると思っています。 地域のことを考える、自分達のは自分達で決めるというときに、女性がその場にいないようでは、やはり目的は達成できないのではないかと。
澤田委員長	はい。ありがとうございました。 校区自治協議会をきちんと校区における意思決定の場にしていくこと、女性の力を生かしていくことが、地域が変わるために必要ではないかという意見でした。校区自治協議会の立ち位置があやふやなところがあるかもしれません。 熊本市で校区自治協議会が作られた当時は、全国でも非常に早い取り組みでした。その後、熊本市の後に続くように校区単位でのまちづくりが全国で一斉に広がっています。そのため、校区自治協議会の取り組みも非常に重要になるという意見でもあるかと。 その他、校区自治協議会の在り方について、ご意見はないでしょうか。「校区自治協議会の今はこうだが、こうなるべき」といったものです。 はい。野口委員お願いします。
野口委員	色々な地域団体が困っていることは、「事務局がない」ことだと思います。それが成り手不足にも繋がっているかと考えています。今話が出ている校区自治協議会とそれからコミュニティセンターがありますが、校区自治協議会には色々な団体があるわけですので、自分の校区のコミュニティセンターが事務局となることによって、各団体長も非常に助かると思います。 私自身も長年、社教長をやっておりますが、事務は自宅でやっております。パソコン作業など、かなりの量になります。 そのため、事務局を作ってあげることが成り手不足の解消になるのではないかと考えております。
澤田委員長	もしも、校区自治協議会の事務局機能がしっかりとしたものがあれば、例えば、校区自治協議会の会長が変わることはあっても、校区自治協議会としての統一性が保たれるということがあるかもしれません。 少し事務局に伺いたいのですが、現在のコミュニティセンター長や主事などが事務局としての機能を発揮しているところはあるのでしょうか。
事務局	コミュニティセンターを管理しているところが、同時に校区自治協議会も管理

	している例もあります。
事務局	制度的にはコミュニティセンターは市の施設であって、その管理を指定管理ということで地域の運営委員会に委ねているかたちになります。そのため、コミュニティセンターとしての仕事として校区自治協議会の事務局を持っているわけではないですが、結果として同じ方が管理している場合が多いですし、校区自治協議会の連絡先や住所をコミュニティセンターに設定していることもあります。
澤田委員長	指定管理として委託している運営委員会というのは、コミュニティセンター運営委員会であって、校区自治協議会とはイコールではないということですか。
事務局	その通りです。ただし、コミュニティセンター運営委員会と校区自治協議会のメンバーが重なっていることは多いです。
澤田委員長	今の話ですと、コミュニティセンターを運営するのと同時に校区自治協議会としての事務も担っているところがあるということです。
野口委員	その場合は、コミュニティセンター長と校区自治協議会会長が兼務しているところかかと思います。
小林副委員長	地域の予算的なことはどうなっているのでしょうか。お金のことです。 例えば、今の野口委員の話を聞いていると、結構個人的な負担があるのではないのでしょうか。私自身も芳野地域を見ていると、連合会長が校区の会長もやっておられますが、何か取り組みを行うたびに自分のお金がどんどん出てくるように見えます。「大丈夫なのかな」と心配に思っています。 そのため、個人的な負担が多いことが「会長職は受けたくない」とか「継続するのが大変だ」などに繋がっているのではないのでしょうか。 秋山会長いかがですか。
秋山会長	ほかの校区とは違うかもしれませんが、私の校区では自治会長が町会費を徴収しています。徴収したお金の中から校区自治協議会に1世帯あたり80円をいただいております。それに加えて、市から補助金もありますので、個人的なお金を持ち出すことはありません。繰越金が20万円ほど毎年あります。 それから、組織のことですが、コミュニティセンターは校区自治協議会の配下に置いています。そのため、校区自治協議会の住所はコミュニティセンターの住所にしています。ただし、校区自治協議会の事務局はコミュニティセンターとは別にありますので、コミュニティセンター長と会長は別の方です。
小林副委員長	自治会を運営するためのお金はあると思いますが、会長職を担う際に事務局がない場合に自宅のパソコンで印刷したり電話をしたりといったことがあるのではないかと思ったところです。
野口委員	自治会長はそのようなお金はありますが、ほかの団体はありません。例えば、社協長や老人会長などです。
秋山委員	私の校区では、他の団体も同じような取り扱いです。
野口委員	そうなんですね。私の地域ではありません。

秋 山 委 員	各自治会から各種地域団体に対して、お金をあげていない団体は民生委員やPTA やコミュニティセンターなどだけです。それらは独自でやっておられますので。
野 口 委 員	そのお金は人件費も含めた経費でしょうか。
秋 山 委 員	それも含まれております。
野 口 委 員	年間どれくらいの金額でしょうか。
秋 山 委 員	団体によって違います。校区自治協議会は先ほどお話ししたように、1 世帯あたり 80 円ですけど、一番高いのは体育協会の 100 円です。 あとは、団体の活動内容によって金額を変えています。
澤 田 委員長	ちなみに世帯数はどのくらいでしょうか。
秋 山 委 員	約 4,000 世帯です。学生世帯は自治会費を安くしております。さらに、各町内で町内会費がばらばらです。
野 口 委 員	町内会費はいくらでしょうか。
秋 山 委 員	1～18 町内ありますが統一ではありません。ちなみに 15 町内は 300 円です。高いところでは、400 円、500 円のところもあります。一番安いところで 250 円です。
澤 田 委員長	月額ですよ。
秋 山 委 員	そうです。
野 口 委 員	私の地域は年間 1 万円です。そして、校区自治協議会に対して、世帯数に応じてお金をあげています。
澤 田 委員長	このあたりは、それぞれの地域のこれまでの流れなどによって違っているようです。
越 地 委 員	こういったことも含めた情報交換が正に必要です。
事務局	校区自治協議会の会長が集まる研修が市全体で年 1 回、中央区内では年 3 回ほどありました。そのような研修の場で大きなテーマとしてあがるのが、「会計の問題」でした。 そのため、例えば、秋山会長の地域では「こういったやり方をしている」とか、違う地域では「こういったやり方をしている」というように、いくつか例示するような内容で開催もしていました。 しかし、まだまだ行き届いていないのかもしれません。
野 口 委 員	社会福祉協議会は、熊本市中心部はゼロのところもあるようです。私のところでは、1 世帯 500 円です。それほど開きがあります。ゼロでは何もできません。

	では、どのように運営しているかという、香典返しで賄っています。しかし、今では家族葬が増えているため、香典返しも少なくなっている、運営が大変という声も聞かれています。
北岡委員	私の地域でもお金があまりありません。同じように個人葬が増えているため、香典返しが少なくなっています。そのため、80歳以上にしか敬老会の案内を出さなくなりました。 また、1世帯あたり50円ほど値上げをいたしました。そうでないとどうしようもないということで、校区自治協議会や評議員会で話が決まりました。 現状では、老人の方でも元気な人が増えています。しかし、一方で経費の面では少なくなりつつあります。地域によって、75歳からだったり80歳からであったりばらばらなようです。
野口委員	私の地域では数えて60歳からです。
北岡委員	それはとても早いですね。
秋山委員	私のところの老人会は60歳からです。
野口委員	それは、満60歳以上ですね。私のところでは数えて60歳からです。
越地委員	話は変わりますが、先ほど今月に校区自治協議会会長の研修が開催されるとお話ししましたが、「区単位」の研修を含めておりませんでした。「区単位」ではこういった研修をしているのでしょうか。そのあたりもぜひ、実態を把握していただきたいです。全体での開催も必要ですし、区単位での開催も必要です。
事務局	年2回ほどは開催しているかと思います。
越地委員	やはりそういった場は必要ですね。 今度、熊本市全体で行う研修のテーマは「女性パワー」です。昨日、東京に行かれた会長をお呼びしています。その方からご自身のことであったり、東京での会議の模様などを引き出してみようかと思っています。
小林委員長	ぜひ、こちらにもフィードバックしていただきたいですね。 聞きにはいけないんでしょうか。
越地委員	いいのではないのでしょうか。ただし、時間はとても短いです。 今、市にお願いしているのは、せっかくの機会なのに時間が短くもったいないので、独自にテーマを掲げて開催してはどうかを言っています。 ただし、今回の研修は男女共同参画課が連携して組み立てを行っています。しかし、全体として50分ほどしかないので、ちょっとしたきっかけとなるくらいです。本当は、「なぜ会長になったのか」、「やってみての苦労」、「やりがい」など根掘り葉掘り伺えれば、非常に参考になるのではないかと考えています。 私の町内単位でも成り手不足の問題があります。そこで、選考委員会を作ろうということになりました。自治会長選考委員会です。というのが、現在の自治会

	長が「あなたが次の自治会長をしなさい」といったパターンでずっとやってきておりましたが、次の会長を自分で見つけなければならぬため負担も大きいです。そういったものに矛盾を感じたことから選考委員会を立ち上げました。 私もメンバーだったので、女性の自治会長に話を持っていきました。そうすると快く受けていただきました。今は男性の自治会長ですが、それからお二人ほど女性の自治会長が生まれました。 そのように地域の中には人材がいるわけなのです。ずっと自治会長が女性である必要はありません。次は男性かもしれませんし、また、女性になるかもしれません。その繰り返しでもいいのです。
北岡委員	その選考委員会はいまでもあるのでしょうか。
越地委員	今はもうありません。
北岡委員	私の地域も同じです。同じような選考委員会がありましたが、いつの間にかなし崩し的になくなってしまいました。 では、現在何をやっているかという、現自治会長が目星をつけて専任しています。そのため、「なあなあ自治会」ができてやすくなっています。そのように選任された自治会長は、次の自治会長も同じように選ぶわけですね。結果的に「お友達自治会」のようになりがちです。 だから、そうならないように5人程の奇数の委員で構成された町内自治会長を選考する選考委員会を作ったのですが、ある時期から無くなってしまい、公民館長が町内自治会長をするようになってしまいました。 以前、たまたま野口委員と電話する機会がありましたが、そのときに、町内自治会長もこの委員会のように公募を行えばいいのにと話をしました。やってみたい人が手をあげていただく方法も面白いのではないのでしょうか。これも地域内で提案しましたが、誰も聞いてくれませんでした。
野口委員	地域の中には、長年住んでいる人と後から住み始めた人との間に、何かしらの境があります。できるだけ、長く住んでいる人の中から会長を選びたいという地域性があるのかもしれませんが、もうそういう時期ではありません。地域から公募して、選考委員会が選考する時代に来ています。
北岡委員	そういう目線でいいリーダーを養成することも必要ではないかと私自身も考えています。
野口委員	もう1点よろしいでしょうか。 私がしきりに自治会加入率のことを申し上げているのが、毎年赤い羽根募金について、私の地域では個人個人が自発的に支払うのではなく、町内会費として徴収した中から、1世帯あたり500円分を払っています。しかし、毎年毎年、募金の金額が減っていつているのです。それは、やはり自治会加入率が悪い地域は集まらないからです。 そこで、市に自治会加入率の状況を伺いましたが、約86%という答えが返って

	きました。しかし、なぜその数字で募金額が落ちるのかという話になりました。よく聞いてみると、加入率のデータのとり方が「自治会補助金の申請時に地域から提出される加入世帯数」で計算しているとのこと。私の持論では、校区の社会福祉協議会への助成に使われているデータで計算すると、正確な数字が出てくると思っています。86%は高いと感じています。色々と聞いてみるとそんなに高くありません。別の角度で検討する必要があります。
澤 田 委員長	ありがとうございました。そろそろ時間となります。 地域の団体は地域を運営する主体ですので、地域内での重要な意思決定を行っています。これが会社であれば、新入社員が研修を受けて仕事を学び、課長になり、部長になり、といったように、段々と経営というものを覚えていくシステムがあります。それが地域のことになると、いきなりふわっとした感じになります。予算の積算や人材の育成などの方法も分かりません。そういう状況に現在の地域が陥っている可能性があります。 また、自治会長自身が知っている人の中から次の自治会長を選ぶことについても、人間というのは知っている人にしか頼めませんので、当然のことです。知らない人にいきなり「次の会長はあなたです」と言うわけにはいきません。 以上も含めて、今後の新しい地域の在り方、新しい地域自治のシステムというものをしっかりと我々が作っていかなければなりません。今までのやり方というもの、段々と制度疲労が出てきています。また、野口委員が言ったように、以前から住んでいる人と新しく住み始めた人との間の壁というものも、地域におけるきちんとしたシステムがないからかもしれません。自治会予算にしても、何に使われているのか分からないといった状態は、「ちょっと嫌だな」と感じます。 昔ながらの自治会ではなく、地域を自立的に運営していく主体としての自治会と、校区自治協議会がその上に立って、校区の意思決定を図っていくことが重要になります。越地委員の話を踏まえて、校区自治協議会が校区内全体の予算の決定権を持ってもいいかもしれません。 皆様の話を全体的に聞いていると、校区自治協議会の在り方も含めて、新しい地域自治が必要になると感じました。現在は、あまりにも地域の経営に対して科学的な視点が不足しているような気がします。地域自体が手探りでやっているように思えます。モデルケースのような地域を調査し、うまくやっている事例については、積極的に情報提供していくことも行政の責任でもあります。 もう既に2時間たってしまいました。今回、皆様からご意見を伺いましたので、その内容を事務局でまとめていただき、大きな方向性を組み立てていきたいと思えます。組み立てた案について、次回ご意見をいただきたいと思えます。 最後に何か委員の皆様から、話しておきたいことはないでしょうか。
越 地 委 員	資料の中にある「開かれた地域運営」とあります。これは、先ほどから出ていますがそのためのノウハウが必要です。「開かれた地域運営」もっとものことです。そのためにはノウハウが必要です。もっと言うならば、方向性や理念を掲げようと思えば、どれだけでも掲げられます。しかし、私は理念よりも実践に尽き

	と考えています。実践をどれだけ謳い込めるかです。 「自主自立のまちづくりを進めなければいけない」ということは、何十年も言っているわけです。それでは、そのために何をするのかということで、スローガンよりも実践に踏み込まなければ堂々巡りになると思います。 ぜひ、実践について形として残していただきたいです。
澤田委員長	ありがとうございました。 その他ございませんか。
高智穂委員	今まで地域活動をやってきた方が悪いわけではありませんので、それを認めつつ新しいことに取り組むことが大事なと。熊本という土地柄上、思ったように活動できないこともあると思いますので、これまでの均衡を保ってきたことを新しいことを取り入れることで、すべて壊してしまうのは良くありません。「新しいことに取り組みたい」、「新しいことをやっていきたい」といった地域が次のステップを踏めるようなアプローチや手助けが重要だと感じました。 みんながみんな「そうしていこう」といった指針よりも、「やりたい、やっていきたい、ステップアップしたい」という方々がサポートを受けられる形になっていけばなと思います。 今でも十分に頑張っている人は沢山います。それを忘れてはいけません。
澤田委員長	ありがとうございます。 その他ございませんか。
越地委員	まさにその通りだと思います。自分たちのことは自分たちで決めるのが自主自立だとすると、「私の地域はこのやり方」といったように、それぞれの地域に個性があっていいわけです。 しかし、その前に総じて、一度共通認識を持った上で、「では、うちはこのやり方でやってみよう」や「伝統のやり方を継続しよう」といった個性があればいいのです。このような個性は尊重しつつ、新しいシステムを磨いていくことでもあると思います。同感です。
澤田委員長	ありがとうございました。 皆様から充実した意見をいただきました。次は1月頃の開催ですが、いよいよ提言書のイメージを作らなければなりません。たたき台を示した上で、皆様から意見をいただきたいと思います。 我々の提言書が熊本市の次の世代の地域づくりに生きていくと思いますので、ぜひ皆様から忌憚のないご意見をいただきたいと思います。 最後の事務局からの連絡事項をお願いします。
事務局	次の会議は1月頃開催予定です。皆様からの意見をまとめて、次の資料を考えたいと思います。その他必要な資料があれば、事務局までお知らせください。 以上です。
澤田委員長	それでは、これをもちまして第6回熊本市自治推進委員会を閉会いたします。 ありがとうございました。